

(松鶴附記) この噺は大正七年頃京都の芦邊館に出演中、恰度同じ席に出演中で有た、現今の桂三木助師に教はつた物であります、此機会に更めて御禮を申します。

話中に出る方言の注解

ブン(黄金蟲)  
 おひつ(飯櫃)  
 こうこ(香々、漬物)  
 ハスカイ(斜め)  
 掛合ひ(同じ様な事を云ひ合ふ事)  
 廻り道具(廻り舞臺)  
 甚平を頼んで掛合ひにやつた(交渉と云ふ事、同じ言葉であるが、意味は全然違ふ)  
 文字合せ(宛て字)

此噺の重なる口演者

故三代目 桂文枝 (橋本 龜吉)  
 故 笑福亭松光 (梶木 市松)  
 故 桂枝太郎 (岩本宗太郎)  
 故 桂歌之助 (春井和三郎)  
 現存 桂米團治 (早田 福松)  
 現存 桂三木助 (松尾 利男)



近世落語家傳ノ三

桂 枝 雀

中 濱 靜 圃

名人文左衛門の一門を以て堅め、飽くまで行儀の良い素噺を以て本位とした桂派は、法善寺の金澤席に現花月席を本據として、永年搖ぎなき牙城を誇たものであるが、文左衛門引退後、中堅處の相次いで死に依て、聊か淋しさを感じられた折柄、新興の三友派が、紅梅亭に現花月食堂に據て、舞踊、音曲、曲藝、其他鳴物入の賑やかな物を、雜然と取り交ぜた、新しい經營法で迫て來た、それは三友派の事實上の創立者、月亭文都、笑福亭松鶴(竹山人)、笑福亭福松等の時代を過ぎて、寄席興行の先覺者藤原重助と、これも落語家としてよりも、經世家として偉才を發揮した文團治(後七代目文治)とのコンビに依て産み出されたもので、興行價値を高める爲には、藝術的良心など犠牲にして願みないと云ふ、勇敢なものであつた。

此れが勝敗の數は説かずして明らかが有ふ、何時の世、何れの道を問はず、餘りにも良心的な者の